鹿児島JICA派遣専門家連絡会会報

NEWS LETTER

No.19
2020.03

Contents

1. 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について
2. 会員の活動報告
　海外で採取した金属鉱石を展示
3. 特集：JICAの持続可能な開発計画
　　"SDGs"への貢献
4. 2019年度JICA海外協力隊セミナー
5. 2019年度国際協力パネル展
6. 第７回市民公開講座
7. 学生の国際交流：ウガンダ留学報告
8. 2019年度 JICA九州所長感謝状贈呈
9. 2019年度「連絡会」定期総会報告

マダガスカルにおける国産米市場調査

NEWS

会員の活動報告

・JICA派遣専門家のときに採取した金属鉱石を展示　　志賀　美英

定期総会が開催されました

2020年１月11日（土）に、天文館ビジョンホールにて、2019年度鹿児島JICA派遣専門家連絡会の定期総会が、開催されました。

市民公開講座を行いました

定期総会後に、iBS外語学院の南徹氏を講師に招き、語っていただきました。

学生の国際交流

圃場実験風景

カウンパートのアングズ（左）

鹿児島県JICA（ジャイカ）派遣専門家連絡会について

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長
嶽﨑　俊郎
Toshiro TAKEZAKI

JICA派遣専門家とは、開発途上国のニーズに応じた専門技術や知識を持つ専門家として、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクトに派遣され、開発途上国の最前線で活躍した人たちです。相手国技術者（カウンターパート）にさまざまな技術・知識を伝えることで相手国の技術水準の向上を図り、その国の開発に貢献してきました。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会は、鹿児島県に在住のJICA派遣専門家（OB）のネットワーク（連絡会）です。2019年12月現在、約80名の方が会員になっています。私たちJICA派遣専門家経験者は国際協力の理解者として、また、政府開発援助（ODA）の現場の体験者として、帰国後も地域におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献しています。

会員活動報告

JICA派遣専門家のときに採取した金属鉱石を展示

志賀　美英
Yoshihide SHIGA

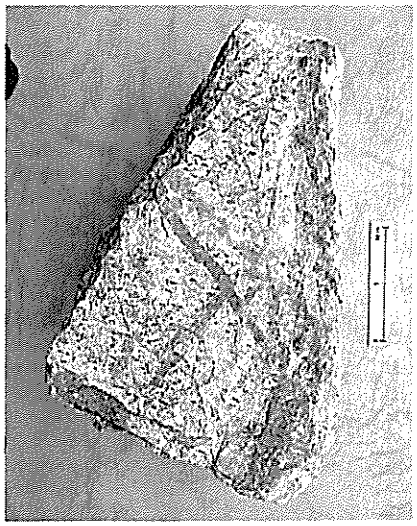
令和元年11月30日（日）から令和２年２月２日（日）まで千葉県立中央博物館で金属鉱物資源展を開催し、著者が50年間の研究教育活動等で集めた金属鉱石のうち主なもの（外国産50点、国内産100点、深海底鉱物資源６点）を公開しました。外国産鉱石のうちの約15点は、JICA専門家として派遣されたチリ共和国（1985.3～86.8）と中国（1996.4～2001.8、長期・短期を含む。）で採取したもので、日本では見られない貴重なものばかりです（表）。

博物館での展示としてはやや地味でしたが、金属の原料を初めて見るほとんどの来場者にとって鉱石は新鮮に映ったようで、真剣に見入っていました（写真）。

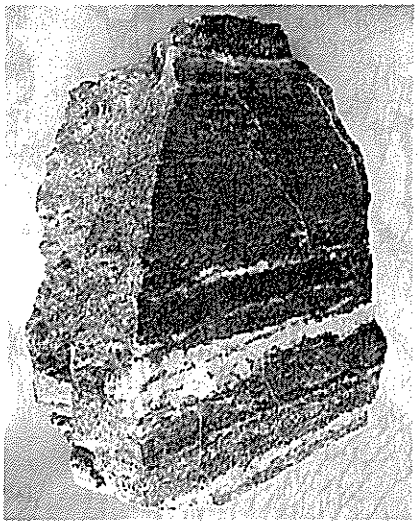
表　展示したチリ共和国産と中国産の金属鉱石（主なもの）

チリ共和国	磁鉄鉱リン灰石鉱石、磁鉄鉱透輝石鉱石、斑岩型銅モリブデン金鉱石、マント型銅鉱石など
中　国	緑色片麻岩質縞状鉄鉱層（＞26億年）、磁鉄鉱スカルン鉱石、スカルン型錫鉱石、レアアース鉱石、リン灰石黒雲母鉱石、鉛亜鉛鉱石など

展示場の様子
（千葉県立中央博物館　第一企画展示室）



斑岩型銅モリブデン金鉱石
（チリ共和国のチュキカマタ鉱山）



緑色片麻岩質縞状鉄鉱層（>26億年）
（中国の密雲鉄鉱）

特集

JICAの持続可能な開発計画“SDGs”への貢献

アフリカ稲作振興とTICAD 7

独立行政法人国際協力機構（JICA）
農村開発部　農業・農村開発第二グループ　第五チーム
畔上　智洋
Tomohiro AZEGAMI

○ アフリカにおけるコメ

「アフリカでコメ」といって、ピンとくる方はそう多くはないのではないでしょうか。アフリカの主食というと、イモやトウモロコシといったイメージが強く、日本のようにコメを食べているアフリカの人々の姿を想像することは難しいかもしれません。

しかし、アフリカの人にとってコメはなじみの深い穀物です。アフリカの中でも特に西アフリカでは、コメを主食とする国が複数国あります。セネガル、ギニア、シエラレオネ、マリなどでは、１人当たりの年間消費量が100キロを超えるなど（日本は50キロ超）、日本の２倍ものコメを食べる国もあります。また、経済発展や食生活の多様化により特に都市部での消費量が増加しており、コメは自給作物と合わせ、商品作物としての側面も持ち合わせています。

このように1990年代後半以降、アフリカでは都市部を中心にコメの需要が急激に増大してきているにも関わらず、アフリカ域内での生産が追い付かず、アジア等からの輸入が増加し続けている結果、自給率は50-60%にとどまっています。コメはアフリカの主要作物のうち、需給ギャップが広がる一方で、アフリカには域内の生産拡大のポテンシャルが高い唯一の作物であることから、アフリカでの食料安全保障を考えるうえで、アフリカでの稲作振興は重要なテーマと言えます。

○ アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）

このような背景により、2008年、横浜で開催された第４回アフリカ開発会議（TICAD IV）の場で、JICAは、「アフリカ緑の革命のための

同盟（AGRA）」とともに、「アフリカ稲作振興のための共同体（Coalition for African Rice Development：CARD）」を発表しました。TICADとは、Tokyo International Conference on African Developmentの略であり、1993年から開始された日本政府が主導するアフリカの開発をテーマとする国際会議のことです。CARDは、アフリカにおけるコメ生産拡大に向けた国際イニシアチブで、「2018年までの10年間で、サブサハラアフリカのコメ生産を倍増（1,400万トンから2,800万トン）」することが目標とされました。

この10年の間、アフリカの23か国を対象とし、JICAを含む11の開発パートナー機関により支援が行われました。その中でJICAは、対象国において計50近くのプロジェクトを実施し、栽培技術、種子生産、灌漑・水管理、収穫後処理等、稲作を行う上での基本技術の確立・普及支援を中心に、農業政策への助言、灌漑開発、農業機械化、バリューチェーン構築支援等、稲作振興に関する幅広い支援を実施してきました。また、アフリカにおける稲作に関わる技術者、研究者を日本および第３国に招いての研修を1,200人以上へ提供し、アフリカで中心に活動する人材育成にも貢献してきました。

このようなJICAの貢献も含めた開発パートナーや政府機関の事業実施もあり、2017年時点でサブサハラアフリカのコメ生産が3,011万トン（FAO暫定値）と、CARDの目標を達成しました。

収穫間際の圃場にて（タンザニア）

○ CARDフェーズ２

CARDは当初目標を達成しました。しかし、アフリカにおける人口増加やコメ食の広がりを受け、現在もコメの需要が増え続けている状況であり、また、生産面だけでなく、輸入米に対抗できるだけの国産米の競争力を強化するといった課題もあります。そのため、CARD関係者で議論を行った結果、CARDフェーズ２を2019年から開始すること、対象国を23か国から32か国へ拡大すること、2030年を目標年としてさらなるコメ生産量の倍増（2,800万トンから5,600万トン）を目標とすることが合意されました。

また、CARDフェーズ２では、倍増に向けて特に留意すべきと考える取り組みを４つのキーワードの頭文字から「RICEアプローチ」と整理されました。

Resilience：
　気候変動・人口増に対応した生産安定化
Industrialization：
　民間セクターと協調した地場の産業形成
Competitiveness：
　輸入米に対抗できる自国産米の品質向上
Empowerment：
　農家の生計・生活向上のための営農体系構築

○ TICAD 7

このCARDフェーズ２は、2019年８月28日から30日にかけて横浜で開催されたTICAD ７の場で、正式に開始が発表されました。JICAは８月30日にCARDサイドイベントを開催し、アフリカの農業大臣や開発パートナーの代表、日本企業を招き、今後のアフリカ稲作振興に向けた議論を行いました。

また、JICAはCARDのほかに、過去のTICADにおいて「市場志向型農業振興（Smallholder Horticulture Empowerment and Promotion：SHEP）」や「食と栄養のアフリカ・イニシアチブ（Initiative for Food and Nutrition Security in Africa：IFNA）」の立ち上げ・展開を表明し、支援を行っています。これらCARD、SHEP、IFNAを通じて、アフリカにおける食料安全保障と栄養改善（SDGゴール２）の達成へ向けて協力を継続していきます。

2019年度JICA海外協力隊セミナー

JICA青年海外協力隊　体験談in鹿児島大学
主催：JICAデスク鹿児島　共催：鹿児島県JICA派遣専門家連絡会

2019年11月７日（木）、鹿児島大学郡元キャンパス共通教育棟２号館１階216号室において、JICA海外協力隊セミナーを実施しました。学生を中心に16名の方が参加し、アイスブレイクを兼ねた自己紹介の時間とJICA海外協力隊の概要説明ののち、帰国隊員の齋藤瑛康さんにナミビアでの体験談をお話しいただきました。

鹿児島大学教育学部を卒業後、教育分野でアフリカ・ナミビア共和国へ派遣され、２年間現地の教員とともによりよい授業づくりを行ってきました。

参加者は、現地ナミビアの装飾品の実物に見て触れて、帰国したばかりで民族衣装姿の齋藤さんのお話に引き込まれている様子でした。

また、グループに分かれて協力隊経験者と話すセクションでは、各グループ話が尽きないようでした。90分という限られた時間でしたが、会場は終始活き活きとした雰囲気で、参加者にとっても充実した時間となったのではないでしょうか。

セミナーの参加者からは、「何気なく来たら大変おもしろく、興味がわいた。」「現地の話をもっと聞きたかった。」「実際に現場を経験されている人の体験談を聞くことで、自分の知らないことを知ることができて本当に良かった。」等嬉しいご意見を頂きました。

そしてこのような場は、帰国後の隊員にとっても自身の活動や経験を活かす良い機会となっています。

（JICAデスク鹿児島　国際協力推進員　外西朋子）

2019年度国際協力パネル展

主催：JICAデスク鹿児島
共催：青年海外協力隊鹿児島県OB会・鹿児島県JICA派遣専門家連絡会

2019年12月５日（木）～12月９日（月）イオンモール鹿児島で国際協力パネル展を開催しました。

鹿児島県出身の青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、そしてJICA派遣専門家一人ひとりが派遣された、国の様子がわかる写真と本人のコメントで分かりやすく活動を紹介したパネルを展示しました。

鹿児島県も在留外国人数が１万人を超えました。日常生活を構成する上で、以前にも増して身近なところに世界との繋がりは多くあります。JICAが実施している国際協力についても、市民の方々が興味を持ちやすい要素を取り入れながら紹介することにより、世界で起きている様々な問題や開発途上国の現状を周知し、理解を深める必要性を感じています。

1965年に初めて青年海外協力隊員がラオスへ派遣されてから50数年にわたり、鹿児島県からも900名を超える方がJICAボランティア事業

へ参加し、現在も43名の方が世界で活動中です（2019年11月19日時点）。

来場者の中には「青年海外協力隊の体験談を聞いて興味を持ちパネル展を見に来た」という方もいらっしゃいました。

今後も鹿児島県民の方々へ、鹿児島県における国際協力の歩みを伝え、より世界を身近なものと考えるきっかけとなる取り組みを続けていきます。

（JICAデスク鹿児島　国際協力推進員　外西朋子）

イオンモール鹿児島に引き続き、2019年12月11～16日に鹿児島大学の郡元キャンパス、同17～20日に桜ヶ丘キャンパスでも国際協力パネル展を行いました。海外に興味を持ち、海外に行って異文化に触れ、広い視野を持ちたいと思っている大学生も少なくありません。そんな大学生に、実際に海外で活躍してきた鹿児島県出身の青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、そしてJICA派遣専門家の活動をパネルを通じて知ることが出来るパネル展は、学生らの夢を膨らませるのに有用に働いていると思います。JICAボランティアセミナー青年海外協力隊体験談 in 鹿児島大学にも毎年、学生が参加してくれるのも、この様な機会が繋がってのことだと思います。今後とも、海外での実際の活動の様子を若者らに紹介し続けていきます。

（鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会長　嶽崎俊郎）

鹿児島大学郡元キャンパス
学習交流プラザでのパネル展

第7回市民公開講座

異文化との対話～魅力的な鹿児島・日本～

iBS外語学院　南　徹
Toru MINAMI

皆さん、こんにちは。iBS外語学院の南徹です。

iBS外語学院は、英語を学ぶ学院というより、英語で学ぶ学院として理解していただいています。

英語で日本文化を研究し、日本の文化や日本人の思想を世界に発信するカリキュラムで構成されています。1980年の創立以来40年の歴史を重ねてまいりました。

今年は、オリンピック・パラリンピックの開催、鹿児島では国体が行われます。

素晴らしいお祭りがやってくる、と沸き立っているようにおもえますが、体験した事のない異文化が津波のように押し寄せてくるということも理解する必要があります。

表面上は素晴らしいようですが、足元はガクガク、フラフラ状態のようにおもえます。

この足元をしっかりと太く強くするには、魅力的な鹿児島・魅力的な日本にするには、どうしたらいいのか、ということを中心にお話をしてまいりたいと思います。

＜下記・講演要点＞

1　プログラムを解除せよ

＊幼児化して自己責任が持てなくなった
＊School Academia（知識を磨く学問）v.s. Social Academia（人間関係力を磨く学問）
＊人間が学ぶための２つの方法
　a）時空を超えた学問に勤しむ（本を読む）
　b）旅をする＜留学＞可愛い子には旅をさせよ！

2　眼力・笑力・誉力を磨け

＊貪瞋癡（仏教の三毒：妬むJealous、怒るAnger、愚痴るComplain）ばかりの自分では？
＊物やお金以外で他人を幸せにする術を身につける
＊笑顔が心を自由にしてくれる
＊人間の本質は愛（愛を生み出すための過程には縁や絆がある）
＊誉める力を磨く５つの基本
　a）感謝する
　b）相手を主役にしてあげる
　c）一緒に喜んであげる
　d）勇気づける
　e）相手の心を燃やしてあげる

3　全てが才能

＊普通じゃないとすぐ病気と言われる。病ではなく才能である
＊才能はその才能を活かすために与えられた知恵である
　すぐ忘れる才能、学校の勉強は苦手という才能、人の話を聴くのが苦手という才能、我慢できないという才能、すぐ怒る才能など
＊７人の小人（小人の才能を上手くコーディネートしているのが白雪姫という先生）
　ドーピー（おとぼけの才能）・グランピー（怒りんぼの才能）・ドック（教え上手の才能）・ハッピー（人をご機嫌にする才能）・スリーピー（寝ぼすけの才能）・バッシフル（照れ屋の才能）・スニージー（直ぐくしゃみをする才能）
＊どんな才能でも無駄な才能はなく、如何にその才能を活かすか？
＊これからの「先生」は、teachingというよりも学生をcoordinate・motivateしていく役割

4　小さい夢と、とてつもなく大きな夢を持て

＊１日の目標、１ヶ月の目標、１年の目標という小さな夢　→　自分との約束
＊軌道修正は、ある程度までは自由にできると考え、決めたことに囚われ過ぎず頑固にならず

ない

＊10年、20年、30年後の夢　→　不可能なんて思わず、夢はでっかいほど、楽しい

＊千里の道も一歩から

5　歴史に学べ

＊過去のHistoryに学び、現在のPresentに感謝して、未来のMysteryを楽しむ

＊西洋社会のバイブルは聖書、日本人のバイブルはご先祖様

＊人生に迷ったら歴史に尋ねよ

＊本を読め

　時空を超えて学べる、1500年昔の話でも源氏物語を読めば解る。神代の話でも古事記を読めば見えてくる。

　近代史を知らない恥。明石元二郎、児玉源太郎、後藤新平、石原莞爾、八田與一など、台湾で学んだ偉人

＊教養（英語では革新的＝liberal arts）（日本語で伝統文化を大切に＝cultural appreciation）

6　好奇心を持て

＊好奇心は脳の最高の栄養

＊子供のように、ありとあらゆるものに興味をもつこと

＊興味をもったら。知的探求の行動をとること

＊科学的に考える癖をつけること（Scientific methodというアルゴリズム）

アルゴリズム　→　問題を解決するための方法や手順のこと

a）observation　観察

b）hypothesis　仮説をたてる

c）experience　経験

d）low of science　科学的に検証する

e）modification　部分修正する

＊修正ができる柔軟性をもつこと

＊Questionをもつこと。これで良いのか？と考えることが一番大切

7　世界に通用する紳士淑女たれ

＊自立心を養うために自分を客観的に見られる世界に見をおくこと

＊世界に学ぶためには、形而上的に哲学的に宗教的に考える必要がある

　形而上学とは道（目に見えないもの）形而下学とは器（目にみえるもの）

＊どんなに文化慣習が異なっても人類普遍のGentleman ship & Ladyshipがある

＊冠位十二階（徳・仁・礼・信・義・智）、五常（仁義礼智信）

＊英語で自分を語り、自分の国の文化を語れるようになること

8　スポンジになれ「Teaching is Learning」

＊柔軟に物事を考えられる学問の探求

Not to be stubborn but to be flexible

＊相手の立場を考えながら伝える訓練（相手を主人公にする、聞き上手になる、質問上手になる）

9　対話を磨け

＊４つの対話

1）他人との対話（聴く力）

2）自分との対話（考える力）

3）自然との対話（八百万の神々との対話）

4）異文化との対話（諸外国および新時代を学ぶ対話）

＊やってみて、言ってきかせて、させて見て、誉めてやらねば人は動かじ（対話の基本）

＊ミラーニューロン（メンタライジングシステム）

＊見て学ぶのがチンパンジー

＊教えられて学ぶのが人間

＊話す力が世を動かす：言葉がはじめにあった、言葉は神と共にあった、言葉は神であった（ヨハネの福音書）

＊対話を磨く武器は、質問力、発信力
＊グローバル社会を生き抜くための最強の武器は英語対話力
＊このままの日本だとカッコーに巣を乗っ取られるような状態になる
　GAFA（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）
　BATH（バィドウ、アリババ、テンセント、ファーウェイ）

10　仕事をするために勉強するのではなく、勉強するために仕事をする

＊佐藤一斎（言志晩録）：
　少にして学べば即ち壮にして為すことあり、壮にして学べば即ち老いて衰えず、老いて学べば、即ち死して朽ちず
＊一生勉強、一生感動
＊青春とは求めて止まぬ心なり
＊全てに好奇心を持って、答えのない世界になぜ、なぜと問いかけながら、人生を楽しむ

ウガンダ留学報告

ウガンダ共和国への留学を通じて

鹿児島大学大学院農学研究科生物生産学専攻
畠中　京介
Keisuke HATANAKA

私は2018年12月から３ヵ月、ウガンダ共和国ナムロンゲにある国立作物資源研究所（NaCRRI）に滞在させていただきました。到着後、冬が始まりだした日本とは打って変わり、暑いが湿気がなく、すがすがしさすら感じる空気と目の前に広がるビクトリア湖がアフリカに到着したことを実感させてくれました。ウガンダ共和国は赤道直下であるため渡航期間は常に最高気温28℃前後と気温はほとんど変わりませんが、日差しは強いため、日中の体感温度は真夏のような暑さを感じました。一方で，標高は高いため，夜間は18℃前後ととても過ごしやすかったです。

生活面では到着後すぐに断水と停電が続き、大変でしたが、現地のJICA専門家の方々を始め、青年海外協力隊およびNaCRRI職員の皆様の協力のおかげで無事に生活および実験共々開始することができました。また、協力隊の皆様には近隣農家への研修を見学させていただきました。参加農家は積極的に発言し、自分たちの稲作を発展させようという意欲を強く感じました。一方で、ここまで積極性を持って参加してくれる地域はあまり多くなく、これからさらに工夫して普及する必要があると伺い、稲作普及の現状を知れました。

実験においては、都合上、雨季の終わりと乾季をまたいだため、雨季には突発的なスコールを、乾季には20日間以上雨が降らない状況を体感でき、自分の実験背景で想定する環境に実感を持つことができたことは非常に良い経験になりまし

た。また、天水田を模した圃場での栽培は初めてであったため、水田とは異なる栽培管理や根切り虫やデメバエの発生などによる被害、土壌の違いによる影響、実験を行う資材設備の不足など、想定外の問題に直面することもあり、改めて現地で実験行う難しさや自分の技量、知識不足を痛感する一方で、実際に現場に行ったからこそ改めて得た知識や現場でしか確かめられないことなど，留学先での実験を通じて学んだことも多くありました。３ヵ月の留学を多くの方々のご協力、ご支援をいただいて完遂することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後もこの経験を活かし、日本および海外の農業の発展に貢献したいと思います。

嶽﨑俊郎会長が 2019年度 JICA九州所長感謝状贈呈を受けました

JICA九州では、長年、センターが実施する事業において、顕著な貢献をされた個人・団体に対し表彰を行っていますが、2019年度は、11個人、６団体に感謝状を贈呈されました。当鹿児島JICA派遣専門家連絡会の嶽﨑俊郎会長（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）は、個人の部においてその功績が讃えられ感謝状が贈呈されました。

https://www.jica.go.jp/kyushu/topics/2019/ku57pq00000ljb6o.html

2019年度「連絡会」定期総会報告

2019年度「鹿児島県JICA派遣専門家連絡会」

日　時：2020年１月11日（土）
　　13：30～14：30
場　所：天文館ビジョンホール４階
出席者：嶽﨑俊郎（会長）、植村吏香（顧問）、稲見廣政（幹事）、山岡耕作（幹事）、坂上潤一（幹事）、馴田義美、野呂忠秀、帖佐徹、帖佐理子、市川敏弘（事務局）、志賀美英（事務局）、水上惟文（事務局）、外西朋子（特別会員）
来　賓：古田宣稔（青年海外協力隊鹿児島県OB会会長）

挨　拶

1．嶽﨑俊郎会長
2．JICA九州センター　植村吏香所長
3．青年海外協力隊鹿児島県OB会　古田宣稔

議　題

1．2019年度活動報告
　欠席の越塩幹事に代わって嶽﨑会長より以下の報告が行われた。
　1）JICA九州の支援を受け、JICAボランティアセミナー（11月７日鹿児島大学郡元キャンパス共通教育棟にて青年海外協力隊説明会）の開催

2）市民対象パネル展「国際協力パネル展～鹿児島と世界をつなぐ人々」を12月５～９日にイオンモール鹿児島３階にて開催

3）2）と同様の学生対象パネル展を2019年12月に、鹿児島大学郡元キャンパスと桜ケ丘キャンパスにて開催

4）会報誌NEWSLETTER 19号の発行、発行部数200、2020年２月発行予定

5）総会の開催（2020年１月11日）於天文館ビジョンホール４階

6）第５回市民公開講座の開催「異文化との対話－魅力的な鹿児島・日本－」、講演者：南徹氏（アカデミー iBS外語学院学院長）

7）ホームページの公開

2．2020度活動計画および予算案

嶽﨑会長から2020年度の活動計画、および稲見幹事から2020年度の予算が提案された。いずれも本年度と同様の内容で承認された。

3．役員改選

2020年度からの会長として、稲見廣政氏が推薦され、承認された。幹事として、総会・市民公開講座担当として山岡耕作氏、NEWSLETTER担当として坂上潤一氏の再任、会計担当として嶽﨑俊郎氏の新任が承認された。活動担当は役員が分担して担当することとした。

5．その他

新規会員の加入が殆どないことに関して議論された。個人情報保護の観点からJICA九州にも現専門家のリストがないため対応が難しいが、全専門家連絡会の共通課題であるので、植村所長がJICA本部に問題提起し、対応を検討してもらいつつあることが紹介された。それまでは、各会員や協力隊の人的ネットワークを活用しながら、個別に新規入会を勧めることとなった。

参　考

市民公開講座

講　師：南　徹　氏
（アカデミー iBS外語学院学院長）

演　題：「異文化との対話－魅力的な鹿児島・日本－」

内　容：演者は40年に亘り、英語で学ぶiBS外語学院のコンセプトのもと、英語で日本文化を研究し、日本の文化や日本人の思想を世界に発信するカリキュラムで若者を育成してきた経験をもとに、魅力的な鹿児島・魅力的な日本にするには、どうしたらいいのか、という視点で講演をして頂いた。

参加人数：56名（うち高校生４名、専門学校・大学生22名）

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

（平成15年２月28日）

1．趣　旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結集する。

2．事　業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

(1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言

(2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等

(3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動

(4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

3．会　員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4．会長及び幹事

(1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長１名および世話役として幹事４名を置く。

(2)会長は会務を総括し、会を代表する。

(3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第２項に定める会務の執行に当る。

(4)会長及び幹事の任期は２年とする。但し、再任は妨げない。

(5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。

(6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

5．その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編集後記

「新型コロナウイルス」、急速に蔓延している様子に他人ごとではいられません。一刻も早い終息を願うばかりです。さて、この冬も暖かい日がありました。雪国でも雪不足でスキー場の閉鎖があったとか。地球温暖化の影響でしょうか。お陰様で、研究室で栽培している熱帯果樹「ドラゴンフルーツ」は元気よく育っていますが、環境の変化に対する不安はぬぐえません。地球環境問題に対する国民的な議論を真剣に考えねばならない時が来ているように思います。皆さんはどう思われますか。

編集人：坂上　潤一

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報　第19号
発　行　2020年３月
発行者　鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会長　嶽﨑 俊郎
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局
〒890-8544　鹿児島市桜ヶ丘８-35- 1
鹿児島大学医歯学総合研究科国際離島医療学内
電　話：099-275-6853　FAX：099-275-6854
E-mail：takezaki@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp
担　当：嶽﨑俊郎（たけざきとしろう）